

上田 進（うえだ・すすむ）

1、プロフィール

翻訳家・評論家。早稲田大学露文科在学中から文学活動を始め、左翼芸術連盟の結成に参加し、以後プロレタリア作家同盟の一員として、広汎な分野に業績を残した。

<生没>

1907(明治 40)年 10 月 24 日～1947(昭和 22)年2月 24 日

<代表作>

翻訳「マルクス・エンゲルス芸術論」「静かなドン」「死の家の記録」
「チェルカッシ」「零落者の群」

<青森との関わり>

黒石市出身の文学者秋田雨雀の娘婿として弘前に疎開。晩年の2年9ヶ月を政治と文学の再建に捧げた。

2、作家解説

本名は尾崎義一。東京市生まれ。郷里が長野県で、県立上田中学に入学したことから上田をペンネームにした。

大正 15 年、早稲田大学露文科に進み、在学中から左翼文学者・プロレタリア作家同盟の一員として活躍した。黒石市出身の秋田雨雀の影響を受け、その長女千代と結婚したことの縁から、昭和 19 年に弘前に疎開し、敗戦後は民主化の追風を受けて日本共産党に入党、津川武一らと日本共産党県支部・新日本文学会青森県支部再建のために尽力した。戦後の物心両面にわたる混乱の中で、社会全体の民主化と新しい時代にふさわしい文学の創造のために献身した。

しかし、不慣れな土地での心労から病を得て、昭和 22 年2月 24 日、わずか 39 年4か月の短い生涯を閉じた。

22 年、「月刊東奥」の3、4月号合併号に「人間上田進について」と題して追悼文集が編まれ、秋田雨雀・沙和宋一・津川武一らが稿を寄せた。

死後には未定稿「佐久間象山」(小説)が残された。